

東西と一ざい

音響卓の台本置きについて

滋賀県・小野 隆浩



プロの公演現場では一般的になってきたが、学生の公演でも公演台本をiPad等のタブレットPCに取り込んで使っているオペレーターが増えてきた。大阪芸術大学でも3割程度の学生がこの方式でオペレートを行っている。紙台本と同じようにメモ書きもできるし、紙とは違い何せ自照式なので暗い現場でも視認性が良い。ただし、いつも頭を悩ませるのがその置き場である。紙の台本でも同様だが、まだ紙の台本は直接音響卓の上に置くことができる。しかし重量のあるタブレットはそういうわけにはいかない。「台本

置き」に関しては試行錯誤を重ねた結果「譜面台が一番使いやすい」ということで、数種類の譜面台を使っている。通常の「スタンド型」や小型の「卓上型」そしてラップトップPC用の「PCスタンド型」と好みに応じて様々に使い分けていた。「譜面台」は「台本置き」としては問題ないが、やはりその置き場は悩みどころでもあった。

そんな中、ある公演で学生が「液晶モニター台」を流用した「台本置き」を持ってきた。音響卓机にCクランプで固定するタイプのもので、上下左右にスイングして「台本置き」の位置を変えられる優れものである。しかも「台本」は空中にあるため音響卓の操作には支障がなく、邪魔なときには、スッと移動できる。(写真1)ただ、難点があった。重量のある液晶モニターを支えるため、要所ごとに6角レンチで締め付ける必要があり、またアーム部分も太くてゴツ

イ。「空中のスイング機構は魅力的だが、もう少しシンプルな譜面台はないだろうか?」と探してはみたものの、なかなかこれといった製品にはたどり着かなかった。



写真1

ところが灯台下暗しというか「譜面台」ではなく「書見台」というジャンルに、ピッタリの製品を見つけた。(写真2)OA機器のメーカーであるサンワサプライが出している「書見台・ブックスタンド」である。これは「書見台」に元になる資料を置き、PCに入力したりするときを使うもので、机にCクランプで固定できるし、台自体の高さやアームの長さも変えることができる。当然角度や位置は自由にスイングし不要な時は邪魔になら

ない場所に動かせばよい。多少重いタブレットを置いて大丈夫だし、A4見開きサイズまでの台本だったらかなり厚めのもので対応している。何と言ってもうれしいのは「ページストッパー」が付いているため、緊張した本番でよくある「台本のページ飛ばし」というトラブルがおこりにくい。(写真3)



写真2



写真3

これを使うことで、無事に「台本置き」と「台本置き場」の二つの問題は解決した。さらに利点はこれだけにとどまらないようで、「書見台」を使った学生は一様に「あまり疲れなくなった」とも言っている。台本と音響卓そして舞台を往復する視線の変化による

疲労だけではなく、横を見て下を見て正面を見てといった繰り返しによる「首の疲労」にも効果があるようだ。疲労回復の早い学生だけではなく、ベテランの協会の方々には是非ともお勧めしたい「台本置き」である。

(大阪芸術大学

びわ湖ホール)



子供の頃の話 その2

岐阜県・熊野 大輔



5号前の本誌で、子供の頃の話について、続きはいずれまた機会があればと適当なことを書きましたが、今回ようやく続きを書きます。前回のことなど誰も覚えちゃいないでしょうが。

(あらすじ：8歳の春からノルウェーのオスロで暮らし

ていた私が、夏休みを迎えます。)

私の通っていたコルシュボル小学校での思い出として、書き加えておきたい出来事があります。ある日のランチタイムに、突然の大雨が降ってきました。すると校内放送で「外へ出よ」と。訳の分からぬまま先生や友人たちに手を引かれて校庭に出ると、すでに出ていた同級生たちが満面の笑顔で、びしょびしょになってはしゃいでいます。私も勿論びしょびしょになって走り回りました。汚れたまま家に帰って3歳上の姉に「楽しかったね」と言ったところ、「窓から見てた。あんなことしてたの、1、2年生だけだ」と切り捨てられました。あれは今でもやっているのでしょうか。

さて6月16日から夏休みです。前回、7月に学芸会があったと書きましたが、6月の誤り(正確には6月9日)です。実家から回収してきた段ボール箱の中から当時の日記が出てきたので、記憶との整合性が図れると思いましたが、さすが私の日記。毎日休まず書かれている筈などありません。とぎれとぎれの記憶と日記をたよりに、だいたいの行

程を記してみます。

8月末までの長い夏休みの間、父親の研究の一環として、ヨーロッパを巡る旅に家族でついていくことになりました。6月20日に、スウェーデンのバルムランド地方にある、セルマ・ラーゲルレーヴ(「ニルスの不思議な旅」の著者)の家を訪れたとあります。翌日にはストックホルムへ移動。6月22日「船に、のって、ちょっと さきの ばしょに、行きました。くる前に ゆうえんちを見ました。でも、だめでした……(また、とりけし)」とあります。「ちょっと さき」とはどこのことなのか、地図を見てみるとユールゴーデン島のグローナルンド遊園地のことでしょうか。「だめでした(また、とりけし)」とは、遊ぶ約束をしていたのに、やっぱりナシと親に言われて、しかもそういったことはこれが初めてではない、ということでしょう。かわいそうな8歳の私。

「7月10日 ブレーメン」とあった次の日記が「8月2日 ハノーバー」に飛んでいます。ドイツで何があった8歳の私。この間にハーメルンにも行っているはずです。街頭劇で『ハーメルンの笛吹き

男』を観劇しました。笛吹き男に連れ去られるネズミの群れと、そのあと連れ去られる子供たちがたぶん二役でした。逆にブレーメンとハノーバーの記憶がぼんやりしています。日記帳に「ブレーメンの音楽隊」の絵も描いているので行ったことは間違いのないと思うのですが、妻からも指摘されましたが、どうも日記に書くと記憶は薄くなるようです。オランダでは、アンネ・フランクの隠れ家を訪れた他に、レストランでカレーライス注文したら、米に刻んだパイナップルが混ざっていて絶望したことを覚えています。全般にヨーロッパでは飲み水が高額で、それより安いジュース(もっともよく飲んだのはファンタ・レモン味)を買い与えられていました。

スイスで母親が熱を出し、ホテルの部屋で寝込んでいる間に、父親と姉とでリヒテンシュタインまで足を延ばしたことを覚えています。具体的に何を見たのか覚えていません。父親が赤信号でも構わず横断し、青信号になるのを待って横断した私と姉がひどく怒られたことだけ覚えています。いま調べてみたら、この年の3年前にノイトリック

社が創業されていたそうです。

最終的にデンマークのコペンハーゲン(日記では「シヨールベンハーブウン」と書かれています)で、たしかチボリ公園で遊んでから飛行機に乗って帰国した記憶になっていて、その前の滞在地がパリだったとぼんやり記憶しています。逆だったかも知れません。パリではセヌ川が臭くて汚く、街なかにはルンペンだらけだったことと、ルーブル美術館に行ったことを覚えています。日記では8月26日にモンサンミッシェルにも行っているようです(「教会とは、思えないほどきたなく見えた」とあります)が、そこはまったく記憶にありません。このとき私の食のストレスがピークに達していて、毎日1食は日本料理屋に行くことを家族に強要していました。かなりの出費だったと思いますが、今考えても強引に子供を連れまわす親の方が悪いと思います。

帰国の機内で、北極近くを飛んでいる時でしょうか。うすぼんやりとした空に大きく光る北斗七星が目飛び込んできました。まるで映画でも見ているかのように、それは非現実的な明瞭度と大きさで

した。家族は眠っていて、あとでそのことを言っても信じてもらえませんでした。

先日父親が入院しました。すぐ死ぬというわけではありませんが、この時期の私をよく知る人間がいよいよこの世から消滅すると思うと、自分が忘れる前にと、こんな文章を書いた次第です。

お節料理に願いを込めて

東京都・齋藤 美佐男



11月中旬から12月27日まで連続で仕事決定。「なんでこんなに忙しいんだ。あああ!!」と日々天に向かって毒づいていました。他の演劇関係者も皆このひと月は異常に忙しいと、口々に言っていました。どうも、コロナで延期していた企画がこの年末にかけて集中してしまったのではないかと。来年2024年はその反動で暇だという声も、ちらほら聞こえます。コロナ感染症の影響が未だに続いて

いるのだなあ実感しています。

11月21日初日カナダ・ケベック州の演劇『L.G. (ロリエ・ゴードロ)が目覚めた夜』作ミシェル・マルク・ブシャール。翻訳・演出山上優。主催公益社団法人国際演劇協会日本センター。企画・運営戯曲翻訳部会により11月24日までトキョーコンサーツ・ラボにて上演されました。音楽は笠松泰洋さん。演奏者としても参加して頂きました。日本初演で朗読劇としての上演です。最近の朗読劇の傾向で台本は持つのですが動きが伴うという作品が多くあります。この作品もこの形態で上演されました。出演者は台詞を覚えないう分、稽古も短くなり、それだけ毎回の稽古が濃密になります。私は先ず演出家と打ち合わせをして効果音のガイドラインを考えていきます。濃密な稽古をする為、効果音は稽古に参加した初日から出す事になります。稽古場は予算の関係で新宿区内に有る公共の集会所です。駐車場が確保できないため、キャリアバックにパソコンと小さなパワードスピーカーとミキサの代わりにKORG nanoKONTROL2

を押し込み稽古にガラガラと転がして行きます。どの稽古場にもキャリアバックを運搬します。夜の稽古では混んだ電車にこれを持って乗りますので他の乗客にはさぞ迷惑になったのではないのでしょうか。

最後の稽古では、本番に使う機材を車で運べる環境を青年座のご厚意で確保することが出来、笠松さんの音楽も聴くことが出来ました。そこから効果音の手直しです。

劇場入りの日が初日という厳しいスケジュール。しかも2日目の公演が終わって翌日は別の組織が劇場を借りているとの事で撤収し、翌日は本番の1時間前に入り30分で仕込直しをしなければなりません。「このスケジュールはなんなんだ。あああ!!」と心の中で叫んでも、現実は変えられえません。

効果音用にステージ後方上下にスピーカーを各1台床面に配置。笠松さんのグランドピアノにはマイクは使用せず出演者の声とピアノのバランスをとるために舞台前にPCC160を3台設置。スピーカスタンドを一番高く設定して軽めのスピーカーを設置しフロント代わりにして、出演者の声の拡声用に用いました。手

元はO1V96iとPCを使い効果音をポン出ししました。フロントのスピーカーには、狭い演出空間ですが、タイムディレイを掛け、音の定位を整えました。

笠松さんはテーマのフレーズをモチーフとして毎回アドリブで演奏していきます。演者の気分が変化すると音楽も変化していきます。その音楽に呼応するように効果音も変化させたいのですがそれは困難です。ですので入りと切れのキッカケを少し変化させ、レベルも毎回変える事で対応していきました。出演者も公演毎に新たな発見があるのか、基本の演技は一緒なのですが、回を重ねるごとに進化していくので、私も各回の本番を楽しみました。

戯曲もスリリングな展開で、最初に読んだときは結末に驚きました。とても面白い作品です。

この作品は、スターチャンネルでテレビドラマとして放送されました。今でもアマゾンプライムのスターチャンネルで見ることが出来ると思います。作品名は『ロリエ・ゴドローと、あの夜のこと』です。脚本と監督は、原作者のブシャーと同じカナダケベック州出

身のグザビエ・ドランです。話の内容はジェンダーに係わっている、とだけお話しします。

カナダでは舞台上演されているという事なので、日本でもそのうち上演されると思います。ちなみに原作者のブシャーとグザビエ・ドランのコンビで『トム・アット・ザファーム』という映画があります。これも面白い作品でした。アイルランドの演劇同様、カナダの演劇も、日本で取り上げられる機会が多くなることを望みます。

朗読劇は11月24日千穂楽。翌日からは劇団1980の公演『座長っ!』とメメントCの公演『私の心にそっと触れて』の稽古が待っています。劇団1980の公演は書き下ろしの作品です。作・演出河本瑞貴。12月6日から俳優座劇場で初日なのにまだ音が出来ていない。

メメントCの公演。作・嶽本あゆみ。演出・山下悟。再演ですが13日中野ザ・ポケットで初日。声の録音が残っている。機材もやりくりが大変だ。

メメントCの公演が17日で終わって数日後、また劇団1980の作品、脚本・演出大谷美智浩『落語芝居・芝浜』の演

劇鑑賞会関越ブロックの旅公演。普段はプランだけで音響操作は他の人に手伝ってもらうのだけれど今回は、皆メンバーが出払っていて人がいない。自分でツアーに参加しなければならない。その為の稽古も有る「あああ!! どうしたらよいのだ。あああ!!」

そして今日は12月28日。これを書いています。無事生きています。明日からは恒例になっている正月のお節料理作りに突入です。来年はそれほど忙しくなく、ほどほどに過ごせるようにとの願いで、心を込めて作ります。

(東京演劇音響研究所)

昨年振り返って

東京都・坂口 野花



昨年は皆様にとってどんな年だったでしょうか？ コロナが5類になったのは今年の事だったかしら？と思う。街はすっかり賑わいが戻ってきているし、マスクをしなくて

もいいという風潮はすっかり根付いてきた。昨年は夏が長かったし、野菜が順調に育たなかったり、熊の被害も多かったですね。熊とも共存出来るといいのですが。

22年に始まったウクライナとロシアの戦争は未だ収束していない。先日、最近のウクライナ取材した番組を見た。日本に留学している人が、日本から64時間かけて久しぶりにキーウの両親の元に帰るのですが、今でも空襲警報が鳴るのは日常で、鳴ると家族は一つの部屋で過ごす。空襲警報が鳴って一発の爆撃音の音で、現実には戦争が起きているのを体感し、恐怖を感じたとその方のお母さんの証言。滞在中に学生時代の友人達と母校で会うのですが、校内の思い出の庭が爆撃されて、思い出の地が、悲しい記憶の地として上書きされるのを感じたという。滞在中に、兵士になった同級生の一人の訃報を受ける。街には戦って亡くなった人達の写真が掲げられている。亡くなった人達の家族はどんな思いでいるのだろう。街で出会った人たちに取材するが、希望を持つことはできないと言っている。現実こんな思いをしている人々が

るのは、悲しい事である。

さだまさしさんの『遙かなるクリスマス』という曲を思い出した。

(2番から抜粋)

♪メリークリスマス 僕はぬくぬくと君への 愛だけで本当は十分なんだけど メリークリスマス 本当は気づいている今この時も 誰かがどこかで静かに命を奪われている (3番から抜粋)

♪永遠に君が幸せであれと叫ぶ メリークリスマス その隣で自分の幸せばかりを 求め続けている卑劣な僕がいる メリークリスマス 世界中を幸せにと願う君と

いえいっそ世界中が不幸ならと願う僕がいる...

よその国が戦争をしているのに、演劇なんかやっていたいいのか? と考えた事があるけど、微力ながら演劇に関わっている者としてできる事はあると最近では思っている。自分に何が出来るのか、もどかしい事はあります。

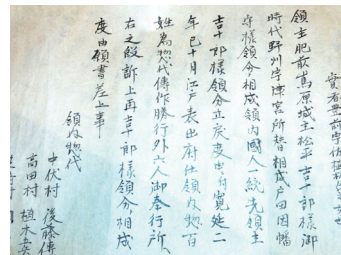
世界のあちこちで起きている紛争や戦争、これが終結して、世界中の人があたりまえの日常の生活ができる事を願いたい。

(東京演劇音響研究所)

「家系図を巡る冒険」

その2 後藤家編

東京都・鈴木 三枝子



2023年9月号に、鈴木家の家系図を作り上げた話を書いた。先祖の戸籍を現時点で取れるだけ取ったら、何と200年前、1823年生まれのご先祖様まで迎れたというお話。

今回はその続編、母方の後藤家ご先祖様の家系図を巡る物語である。漢字多めでお届けします。

そもそも家系図を作ろうと思ったきっかけが、後藤家代々の記録が書かれた「巻物」を見つけたことにある。それは半紙をつぎ足しつぎ足し、長々とつなげられた巻物で、筆跡も代によって変わっている。古い時代の部分は茶色く古び、明治時代のところはまだ白さが残る。

古い時代。古い古い時代。

天正9年、1581年。本能寺の変の1年前から記され始めた、後藤家の大河物語である。

この年、当主の宗明さんが「禪正小弼従五位下朝太夫」という官位を戴くところから巻物は始まる。

どうやら後藤家は戦国時代に武士だったらしい。その後、本能寺の変をきっかけに今の大分県、豊後の国に移り住んだようだ。

基本的にこの巻物には、当主の名前、没年が記録されていて、その他、家にとって大きな出来事があった時に、トピックスが記されている。

「菩提寺が変わったよー(意訳)」、とか、「お地藏様の像を拾ったからお寺に奉納したよー(意訳)」とか。

例えば1749年、徳川9代將軍家重公の時代のトピックス。

「領主肥前島原城主松平吉十郎様御時代 野州宇津宮所替相成 戸田因幡守様領分ト相成 領内国人一統 先領主吉十郎様領分立戻由ニ付 寛延二年十月江戸表立府仕 領内惣百姓為 惣代傳作勝行 他六人御奉行所へ右乃段訴上 再吉十郎様領分ノ相成度由願差上事」

長い。今、読み飛ばしましたね？わかります。でもこれを

必死で読み解いた努力を自ら讃えるために、全文を書き出しました。意識します。

「領主であった島原城主松平家のお殿様が、幕府命令の領地替えで、宇都宮に行ってしまうことになった。これを悲しむ領民を代表して、当主の勝行が領内の惣代何人かと、江戸の奉行所へ『殿様を戻してください』と嘆願に行った。』というエピソードである。

このことから、後藤家は豊後の国に来てから「惣代」、いわゆる庄屋さんをしていたようである。

しかし、大分から東京まで行くとなると、とんでもない旅であろう。何しろ江戸時代なのだ。船とか使えたのだろうか。ちなみに、直線距離で960キロある。それほどまでに、松平のお殿様に戻ってきて欲しかったのか。

私は本気を出した。本気を出して調べた。すると、実際に1729年寛延2年7月23日、幕府の命令で、肥前島原城主、松平氏が下野宇都宮に国替えていた。代わりに宇都宮から戸田氏が島原城主としてやって来ている。

土地柄なのか、気候のせい

なのか、宇都宮と島原は測量上の領地高は同じなのに、実際の年貢は島原の方が2倍程多く、戸田氏は島原に来てから、「実に御当家、空前絶後の黄金時代にて、殊に島原領は収納豊穰にて府庫充実し、家中の輩も上下ともにその恵沢に浴し、生計余裕ありし」と大喜びである。

が、一方、宇都宮に行った松平のお殿様は、現地で年貢引き上げをして、「もみすり騒動」と呼ばれる百姓一揆を起こされている。4万5000人の農民が集結する一揆だったらしい。

島原ではあんなに「行かないでくれ」と悲しまれていたのに、なんともやるせない思いだ。

島原のみんなが江戸に嘆願したおかげなのか、理由は分からないものの領地替えから25年後に、松平氏と戸田氏は再び元の領地に戻っている。後藤家の巻物にも、この時の喜びが、

「安永二年御間届ニ相成 再島原へ御入城 領内国民無不悦」と書かれている。

「殿様の帰還に、悦ばなかった者はいなかった」そうだ。

「おらが殿様」

聞いたことはあるフレーズだが、こうしてみると住んでいる民衆にとっては、実際にそういう感覚があったのだなあと、歴史が肌で感じられる調査であった。

いや間違えた。私は歴史の調査をしているわけではない。後藤家ご先祖の足跡をたどる冒険をしているのだ。巻物に戻る。

「御領内大工職 惣棟梁 被」

突如、この言葉が現れた。

天保16年1845年、ペリーの黒船来航の8年前のことである。この時の後藤家当主、尚勝さんが、領内の大工さんの惣棟梁を拜命したらしい。

え？どうした突然。庄屋さんじゃなかったの？大工の惣棟梁？どういうこと？

代々大工さんだったのか、どこかの代で大工さんになったのか、最早知る由もないが、とにかくこの後は大工さんである。

しかし母方とはいえ、直系ご先祖様の伝承がなぜ伝わっていないのか。

それはこの少し後に、後藤家大パニックが訪れるからなのであるが、ひとまずそれは

置いておこう。

次の当主の、後藤熊四郎義忠さんになると、江戸が終わり明治期になる。後藤家トピックスもだいたい読みやすく、詳しくなってくる。この熊四郎義忠さんは、どうやら彫刻が得意で、宮大工として名をはせたようだ。

現在の大分県豊後高田市を中心に、神社やお寺の造営、彫刻に関わっているようで、若宮八幡宮、和布刈神社、長円寺、などの名前が出てくる。前途洋々、みんな後藤家の繁栄を信じてやまなかった頃なのではないだろうか。

しかし。何たることか、ここで後藤家大パニックが起きる。

明治9年、熊四郎義忠さんの長男傳策さん(30)が、自分の長男と次男を連れて、出奔してしまうのだ。しかも奥さんだけ残して。ひどいぞ、傳策！

ここで後藤家は次代当主の傳策さんと、その後を継ぐはずの男児2人を失うことになる。どうした、傳策！一体何があったんだ！？

この傳策さん、かなりぶっ飛んでいて、長崎に行き細々

亀甲細工をしていたかと思うと、なぜか韓国の閔妃殺害事件に関わって官憲に追われ、当時、日本の統治が始まった台湾に移住し、最後は中国の福建省でコレラで亡くなっている。無茶苦茶だ。

こういった人達が、いわゆる「大陸浪人」なのだろうか。時代と歴史がどんどん身近に迫ってくる。

この破天荒な傳策さんが、私の高祖父、ひいひいおじいちゃんである。

その後、ひいおじいちゃん、おじいちゃん、母の代までは終戦まで台湾におり、戦後に引き上げ船で帰国している。

一方、豊後高田市の後藤家は、傳策さん出奔以前の段階で、跡取りの傳策さん(当時30歳)以外の男子を、養子に出したり、婚に出してしまっている。

更には一人だけ残っていた男子も、日露戦争で戦死しているようだ。こちらの後藤家はどうなってしまったのだろうか。母や祖父からは台湾時代の話は聞いたけれど、豊後高田の話は全く聞いたことがないのだ。

これは・・・。
行くしかないのではない
か？豊後高田に。

巻物に書かれている後藤家
の菩提寺も、熊四郎さんが
作ったとされるお寺、神社も、
令和6年のGoogle mapでちゃ
んと確認できる。現存してい
るのだ。

お墓が見つかるかもしれな
いし、少なくとも熊四郎さん
の造営した神社仏閣は巡れる
はずだ。

うわ！これ「ファミリーヒ
ストリー（NHK番組）」っぽ
くないですか？俄然テンショ
ンが上がってきた。

よし、行こうではないか！
ご先祖を巡る旅に。

「家系図を巡る冒険」、

本当の旅に出かけてきま
す！

(Ivy Cricket)

音について

神奈川県・千葉 治朗



皆さまお疲れ様です。劇団
四季の千葉治朗です。

もう1年ぐらいロングラン
演目と同じ劇場でオペレート
しています。

年間300ステージくらい、
ミュージカルの本番オペレ
ートをやっているのですが、同
じ劇場で本番をやっているの
に毎日違う音になります。舞
台上に出ているドライアイ
スのスモークを見ていると、温
度や風向きによって、動きや
量が変わって見えます。音の
変化も、こんな風に目に見え
たらいいのに、と本番中に考
えてしまいます。音は劇場内
の空調(温度湿度など)、季節、
気象、お客さまの人数や、着
ている服の材質、スピーカー
のコンディション、俳優の体
調、オペレーター自身の体調
などなど、さまざまな要素で
化学反応？して、本番中刻々
と変化していきます。その目
に見えない音というものを長
年の経験と感で操って、だい
たい毎日同じような音響バラ
ンスになるよう心がけて、オ
ペレートをしています。

音のことを言葉で伝えるの
も難しいです。特に俳優さん
に返り(FB)の状態を確認する
ときなど。「霧の摩周湖の真
ん中で歌っている感じ」とか

「ちょっと遠い感じだから、
もう少し近くに欲しい」とか。
よく言われるのが「マツな
感じ」。返りの音に艶がないっ
てことか？ 舞台稽古で俳優
と音響の、そんなやり取りを
見ていた他のクリエイターた
ちが、「音響さんは魔法使い
だね。僕らには見えないから、
何のことだかさっぱりわから
ないよ」と笑いながら言って
いました。

余談ですが、むかし自分が
若い頃に、歌い手の俳優さん
に「ちょっとトイレに来てく
れる？」と休憩時間に言われ、
恐るおそる行ってみると、そ
の劇場のトイレがよく響くト
イレ(お風呂場状態)で「ねえ、
ここで喋ってみて。こういう
音にして欲しいんだよね」と
言われたことがありました。
当時は真剣に悩みましたが、
今では懐かしい思い出です。

舞台音響では無音の静寂も
音響バランスの一つだと思
いますが、その静寂な音響を
作ることが厳しくなってい
ます。それは最近の照明機材
は、どんどんムービングライ
トが増えてきて、その冷却
ファンの音が暗騒音になって
いるからです。特に上空に照
明が吊ってある舞台上はひど
いので、返りの音に影響して

います。照明さんに罪はありませんが、音響さんはみんなストレスを感じていると思います。大型のミュージカルになると、舞台仕込み調整期間にやる音響調整も、照明さんのお休みにやることことが多いのですが、その時は照明電源全体が切れているので、劇場はとても静かで、逆にリアルな音響調整ができません。すぐに解決できる問題ではありませんが、何とかみんなが幸せに仕事できるようにならないかと考えています。

(劇団四季音響部)

バックアップの続き

神奈川県・千葉 真理子



皆さま、新年いかがお過ごしでしょうか、劇団四季の千葉真理子です。

新しい年を迎えました。しかしとても恐ろしい出来事が多発しています。自然災害、人災・・・自分の力ではどうにもならない事です。どうか早く平穏な日々が戻りますよ

うに。皆さまのご無事をお祈りしております。

さて私も、去年の暮れから慌ただしい生活を送ってまいりました。前号で引き継ぎを行っている旨をお話ししましたが、その最中、1幕がやっと終了し、2幕の段取りがいっぱいあって超大変な場面を「やったぞー！」と意気込んでいたところ、急に別の作品もやることになりまして荷物まとめて出張です。引き継ぎ中での、また引き継ぎ、オンパレードです。

四季のロングラン公演ではバックアップ体制を考慮し、順次この「引き継ぎ」を行っていかうとしています。通常1つのカンパニーに、オペレーターが1組しかいませんでしたが、このご時世です。最近サブオペレーターやワイヤレスマイクケアのステージスタッフはダブルで担当し、一人に何かあっても大丈夫なように、やっとなってきました。しかしチーフオペレーターはなかなかそうもいかず、一人で頑張っています。そこで私の引き継ぎオペレート人生が始まったのです。

バックアップという立場のため、完全コピー的なオペレートを目指しますから、本

当に(やりにくい)大変なオペレートです。自分の好きなように出来ないストレスが、巨大な山、富士山のように高まっています。日本一じゃなく世界に飛び出しエベレスト級です。(かなり、大げさですな一笑)

今、その引き継ぎも全幕やる事ができていますが、毎日ハラハラドキドキで、色々やらかしています。でもその引き継ぎも一応やり遂げた(かな・・・)という事で間もなく卒業します。

今度は自分の結構慣れた作品のオペレート(バックアップの立場じゃないです)をやります。でもこれも途中で交代します。今度は引き継いでもらいます。別の意味でまたまた大変です。次の人の事を考えてシステムを考えていくので、結局100%自分のやりたいようにはできないですから。でもみんなができた方が良いでしょう。

ロングラン公演を安定に維持していく為には、すぐ交代できるバックアップオペレーターが必要です。その作業には時間がかかりますし、体力的にも精神的にも、当人同士も周りの人達にとっても大変負担がかかることです。今、

私はその一端を担っています、2作品制覇、これからも意欲的に頑張りますよ、ハイ。

では新しい年が、平穩無事となりますように。どうぞご自愛ください。

(劇団四季音響部)

地方発信の演劇作りと その地域性について

神奈川県・百合山 真人



新年あけましておめでとございます。能登半島地震や羽田空港衝突事故など居た堪れない新年の始まりで、被災にあった方々のいつもの生活と美しい景色の復興を心より願っています。

2023年12月、私は水戸芸術館主催の『ミュージカル水戸黄門』公演で水戸市に二週間ほど泊まり込みの生活でした。水戸の方々と触れ合う中で地方発信の演劇作りや地域性など色々なことを感じましたので、その考えをまとめていこうと思います。

そもそも水戸とは個人的な

繋がりは全然なかったのだが、2022年にふとしたきっかけからお仕事することになり、2023年も引き続き担当することとなった。水戸芸術館には、若かりし頃、お世話になった制作さんや演出助手として出会った方が演出を担当するなど、不思議なご縁があり、何かの巡り合わせがあるのだろうとは思っていた。

2022年に初めて水戸市に降り立ち、その頃は劇場の前に水戸市民会館が建設中で、2023年のオープンを目指していると聞いていた。そして、昨年2023年12月に改めて降り立った時には、本オープンを迎え、真新しい劇場がそびえ立っていた。見学がてら歩いていると、コンサートやミュージカルなどの外部公演や水戸の方々によるクラシックコンサートなどが開催されていた。ちょっと驚いたのが、オープンスペースに図書館の勉強

机みたいなものがあり、そこで学生たちが勉強に励んでいた。本は少ししかないのだが、市民会館の中でそうした風景を

見るのが驚きと共に、劇場と市民の新しいコミュニケーションの姿を見るようで感激した。水戸芸術館と水戸市民会館が隣合わせでできたことで、水戸市の文化芸術の発展をそれぞれの役割の中で果たして行くのだろうと期待感が高まった。

そして話は水戸芸術館に戻るが、滞在中に年末恒例の「第九」が4年ぶりに開催していた。(写真1)タイトルは、「水戸の街に響け！300人の<第九>2023」。一般公募の市民など約300名の大合唱団が10月から練習を重ねており、1999年から始まって、20回目を迎えたようだ。ところで、この年末恒例の「第九」だが、実は人生で初めての体験であった。冒頭に司会の方が、ウクライナやガザなど各地で紛争が続いている状況だが、この「第九」を歌う、そして、その場を共有し一緒にいる、とい

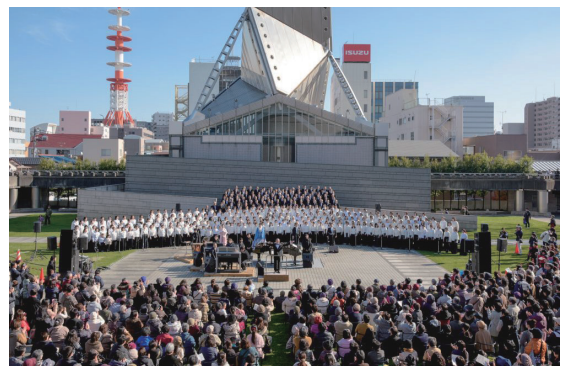


写真1

うのは、平和への祈りという
意味合いがあるそうだ。

300名による歌声には、本
当に感動したし、「第九」の有
名なフレーズの前段階や後ろ
に沢山の音楽的な流れがある
ことにも改めて感じるものが
あった。あのフレーズは「平
和への祈り」と思ってから聴
くと、今までと全く感じ方が
変わっていた。

水戸の街で、水戸の方々が
歌い、水戸の方々が享受する
ことに本当に意味があると思
ったし、全国各地で行われて
いることにも腑に落ちた。各
地の日本の伝統芸能のお祭り
とベクトルは似ているが、そ
の表現方法が違うだけで同
じ意味合いを持つと感じた。

そして、やっと本題といひ
ますか、前述の第九の後に開
催された『ミュージカル水戸
黄門』公演に戻ります。

2020年秋、コロナ禍まっ最
中で茨城県内のアーティスト
たちはほとんど仕事がなく、
それどころか人前でやって見
せる機会すら失われており、
そうしたアーティストに寄り
添えることはできないか、と
いうのがこの企画の始まりで
あった。2021年7月に『夏
の陣』として公演が始まり、同
12月に『冬の陣』、2023年9月

に『光圀ロマンス編』、そして
今回2024年12月に行われたの
が『ミュージカル水戸黄門』で
ある。

地元茨城を盛り上げようと
頑張っている安達勇人さんを
はじめとして、講談師・マジ
シャン・ストリートダンサー・
津軽三味線・尺八・アイドル・
ミュージカル俳優・舞台俳優
など、茨城をゆかりに持つ沢
山のアーティストたちが企画
に賛同して、公演の度に徐々
に集まってきた。それは、水
戸黄門が若かりし頃、色々な
人と出会い、その中で成長し
ていったという史実になぞら
え作品に重ねている。フィー
ルドが違うとはいえ未来を拓
こうと頑張っている若いアー
ティストたちの姿に何度も勇
気づけられた、と企画・脚本
の井上桂氏(前・水戸芸術館
ACM劇場芸術監督)は述べて
いる。

そして、今回はスタッフな
どは東京から集まったが、今
後はスタッフも水戸で出来る
ようになれば、本当に良い
ことだと感じた。現地の方に
お話伺うと、地方都市の水戸
では演劇公演自体が少なく、
来たとしても乗り込みスタッ
フが中心で、現地の若者が育
ちづらい状況など数々の難題

が山積みだそうだ。

水戸芸術館では、昨年から
都内で多数の演劇公演でご活
躍されていたベテランの音響
担当の方が職員となった。技
術も知識も豊富なそうだった
方が、水戸の若者の橋渡しの
役割を持てたら良いし、その
実現のために自分にできるこ
とは微力でも是非協力してい
きたいと思った。私にとって、
水戸は知らない街ではなく
なったのがとても大きい。

全国各地でそうした地方発
信の演劇公演などが行われて
いるが、それと同時に、その
作品を支えるスタッフを育て
ていくことも課題の一つだと
感じた。

街の力の一つである文化を
育てていくということ。実り
ある街が増え、活気がある豊
かな生活へと繋がることを期
待していきたい。

そして、冒頭でも述べまし
たが、震災に見舞われた能登
半島などが復興し、安寧な
日々をおくられるようになる
ことを心から願います。

最後までお読み頂き、あり
がとうございました。

(舞台音響家)

輪島の冬

東京都・吉澤 真



6年前の初冬、筆者は漆芸「沈金」の人間国宝、前史雄先生が行う1週間に渉る研修会を取材するために、能登半島の輪島市に滞在していました。研修は、町の中心部からやや外れたところにある「石川県立輪島漆芸技術研修所」で行われました。先生が、この研修所の所長を務められていたからです。施設は立派なもので、所長室入口の大きなドアが総体、輪島塗りだったことに驚きました。

同じ漆器でも、京都のものが華やかさを魅力としているのに対して、輪島塗りと言えば、あくまでも実用的な器であることを本分としています。ただ、高価ではあり、実用的と言いながらそんじょそ

このプラスチック製とは違う高級感があります。

輪島の漆器の大きな特徴として、地元で採れる珪藻土(けいそうど)を焼いて漆に混ぜるために、素地が堅くできあがること、しかもその漆をふんだんに使い、何重にも塗り重ねるために、漆の層が厚いことが挙げられます。

そこから生まれた加飾技法の一つが「沈金」。沈金は、のみで絵を描くように漆を彫り、そこに、かつて石川で豊富に採れた金粉を埋め込んで定着させるものです。漆の層が厚いとは言ってもミクロの世界。それより深く彫って木地に傷をつけてしまうともう売り物にならないという、やり直しが効かない技法でもあります。

前先生は柔道の有段者で、肩幅など筆者の1.5倍はありそうな大男です。それが細いのみを右手に、小さな漆箱を抱くように屈んでいる姿は、熊が子どもをあやしているかのようでした。

研修の途中には、海岸沿いの料亭でお酒をふるまって頂

き、朝市通りから路地を入ったところにあるご自宅兼作業場でインタビューを行いました。クラシック音楽好きな先生の作業場にはJBLの巨大なビンテージスピーカが鎮座し、アキュフェーズなどの高級アンプが8台もありました。LPやCDは合わせて1千枚以上。これらを聞きながらあの神経を使う作業にかかられているわけです。

と書きながら、実は涙が止まらないのですが、このお宅はもう焼けてしまってありません。先生の消息も、現時点ではわかっていません。

願わくは、輪島塗りに関わる漆採りから器作り、漆塗り、沈金や蒔絵といった加飾技法、流通のシステムなど、これまで積み上げ、作り上げて来た文化が途絶えてしまいませんように。



研修会での前先生(左)